

# 良い映画

好枝

### 良い映画

平栗 好枝

地デジ、地デジとせかされる感じでテレビを買い換えた。

店員はリモコンのスイッチボタンを魔術のよう操り、いろいろとやって見せてくれたが、いざ来てみると、店で見た時と画面の色など少し違うような色彩に映り、ガッカリしたが仕方がない。ボタンの数も多く、操作に慣れるまではやはりひと苦勞だった。

それはとにかく、今までのテレビでは見ることができたビデオの録画が見られなくなってしまい、それが一番残念なことで、めずらしくこの点では夫と意見が一致した。

最近もいい映画はたくさん製作されているが、昔の映画には現在のものと違う豊かな抒情が溢れていたように思う。

それが見られなくなるのは、すごく損をしたような気分になり、何とかしたいと方法を模索したりしている。

保存してある録画のうち、「砂の器」「眼下の敵」「道」それに「ローマの休日」「ここより永遠に」などはすばらしく、この五本が特に私のお気に入りだ。

邦画はたまたま一本だけだが、これは日本映画の名作ではないか思われるもので、松本清張原作「砂の器」だ。三〇年ほど前に制作された作品である。

ある朝、蒲田の電車区の操車所で死体が発見されることから物語は始まる。石川県や島根県の亀嵩という所の方言から犯人を割りだしていくのだが、昭和十三年頃の設定というそのままの雰囲気風景などがすばらしい。調べていくうち、以前は業病といわれた、ハンセン病が絡んでいく重いテーマだ。

中心的捜査にあたるのが、当時四〇歳くらいの、丹波哲郎であり、若き日の今は千葉県知事の、森田健作であった。

最後の詰めの捜査会議で、丹波刑事が「犯人の父親が、ライ病だったのであります」  
そうはっきりと言ったのだった。

その後、ハンセン病の人達の、温泉旅行などが問題になり、丹波哲郎さんが他界したときも、監督の野村芳太郎さんが身罷った時も、期待したが何故か、再放送はなかった。

映画の最後に字幕で、

「今ではいい薬も出来て完治できるようになり、そのためにおこる不幸は、もう過去のことになった」というような言葉で締めくくっている。

私はこの映画で初めてハンセン病という病気を知り、原作も読んでみた。

その病を隠すために起こした、悲しく哀れな殺人事件であった。

映画のクライマックスで流れる、芥川也寸志さん作曲の、オリジナル曲、「宿命」という題名の音楽が全体を盛り上げていた。

犯人の作曲家の、この曲作りの過程と、事件解決への過程を交互に描写し、収束方向に向けながら、逮捕が近いことを示唆していく。見終わってから心に残る可哀そうな場面であった。

この「砂の器」を筆頭にした五本だけではなく、他にもいい映画を録画してあるビデオを残したいと思うのだが。

平成二十年七月